

会員研究

「弥生時代は殺し合いの時代」は 事実か

木村 高久

1 はじめに

平成28年3月に中学校の歴史教科書を扱う番組がテレビ放映された。その中で都内某大学付属中・高等学校のA教諭が「弥生時代は殺し合いの時代」であると主張されていた。要するに弥生時代の日本列島全体で、人々が常に殺し合いをしていて、歴史上最も血が流れた時代だといっているのである。果たしてこれは事実であろうか。

そこで2つの点から考察を試みるものである。1つは弥生時代の実態について、2つとして弥生時代は常に殺し合いがされていたのか否かである。

2 弥生時代の実態

(1) 弥生時代の定義と開始時期

弥生時代の定義と開始時期については大別して、土器の年代

により決める方法と弥生時代として最も重要な指標である水田稲作で判断する方法がある。

前者の場合、北部九州の縄文時代晩期を代表する「夜白式土器」の使用が縄文時代で、「板付I式土器」の使用を弥生時代と定義するものである。

これに対して後者であるが佐原真(注1)は土器を製作技術上で区別することは不可能とする。そして「日本で食料生産を基礎とする生活(水田稲作)が開始された時代を弥生時代とする。」と言うのである。なお、水田稲作を指標とする場合も三説に分かれる。

一は佐原、藤尾慎一郎(注2)等の「水田稲作が出現した時を弥生時代と定義する」すなわち水田稲作出現説をいう。

二は岡崎敬(注3)の「水田稲作がある程度広がって定着・普及した時」とする。三は、武末純一(注4)の「農業が始まり、日本の多くの人々が採集民から農民になっていく時代」との説である。

及した時」とする。三は、武末純一(注4)の「農業が始まり、日本の多くの人々が採集民から農民になっていく時代」との説である。

これらの説を考えるに、佐原が述べるように土器の年代だけで判断するのは困難と考える。

次に水田稲作を指標とする説のうち、一の水田稲作出現説は、時期を特定するのが容易であることに利点がある。よって、今日多数説になりつつある。

しかし、後述するように縄文人が縄文文化の中で生活しているのが圧倒的多数であるにもかかわらず、一か所の集落から水田稲作が出現すれば弥生時代(早期)と定めるのは疑問がある。

この説は、この時代、日本列島の大半で弥生人による弥生文化がほぼ浸透した時代と誤解を生むこととなる。また、縄文人の水田稲作があっても即、弥生時代とされ縄文時代の水田稲作は完全否定されるのである。実態を反映していない説であり私は賛成できない。

また、三は「日本の多くの人々が採集民から農民になっていく

時代」と述べるが、少し遅すぎると考える。私見を述べれば二の「水田稲作がある程度広がって定着・普及した時」が実態を表現していることから妥当と判断する。

(注1) 国立歴史民俗博物館名誉教授

(注2) 国立歴史民俗博物館・総合研究大学院教授

(注3) 九州大学名誉教授

(注4) 福岡大学人文学部教授

期

(2) 弥生時代の具体的開始時期
かつて弥生時代の開始は紀元前3000年頃と言われてきた。ところが1978年(昭和53)に福岡市板付遺跡から縄文土器とともに水田跡が発見され、紀元前5〜4世紀のものと考えられた。これにより弥生時代の開始が1世紀以上遡及することとなったのである。

その後、2003年(平成15)に国立歴史民俗博物館年代研究グループはAMS炭素14年代測定法に基づく測定の結果、弥生時代の始まりを紀元前10世紀まで遡ると公表した。

なお、同測定法は福岡市橋本一丁田遺跡から出土した最古の木製農具を根拠に同遺跡では水田稲作が行われていたと見做したのである。そして、ここから出土した土器の部外面にあったススを測定したところである。

この測定結果については異論があり、未だ決着を見ていない。しかし、紀元前10世紀説が増えつつあるようだ。

なお、弥生時代の開始時期について私見を述べれば、北部九州に環濠集落が出現し、また戦いによる死傷者が現れてくる紀元前9世紀後半であると考える。

(3) 弥生時代の日本列島の実状

国立歴史民俗博物館の見解に基づき、弥生時代を紀元前10世紀から紀元後3世紀までとした期間において、日本列島は水田稲作という一様な文化でなかったことに留意すべきである。

藤本強(注5)、武末・藤尾によれば、日本列島は「北の文化(北海道・続縄文文化)」、「中の文化(本州・九州・四国)」、「南

の文化(琉球列島・貝塚文化)」の三つの文化があったという。北の文化と南の文化は水田稲作を行っていない。

さらに、藤本は「北の文化」と「中の文化」の間(東北北部)および「中の文化」と「南の文化」の間(九州南部・薩南諸島)にボカシ地域があり、全部で五つの文化があったと論じている。なお、ボカシ地域とは両者が混ざり合った様相を示している地域である。

また、「中の文化(本州・九州・四国)」でも水田稲作が短期間で広がったわけではない。発端となった北九州の福岡平野に広まるだけでも約250年掛かったという。また、近畿までには約300年、そして東北北部には600年を要した。なお、東北北部は300年後に水田稲作を放棄するのである。さらに、関東南部へは800年も掛かっているところである。

藤尾は以上の状況から弥生時代だけでは実態を説明できないと考えて、時代はあくまで弥生時代であるが、時期と地域の視点から分類した弥生文化区分を

併せて考えて次のようにまとめている。

(水田稲作開始時期について)
前10世紀後半 九州北部で

前8〜7世紀 水田稲作が開始九州南部・九州東部・西部瀬戸内

前7〜6世紀 近畿地方(神戸市付近)

前6〜5世紀後半 奈良盆地・伊勢湾沿岸

前4世紀前葉 東北北部・前1世紀に狩猟採集へ

前4世紀 仙台・福島県

前2世紀 関東南部

なお、水田稲作が開始されていない時期は縄文時代文化である。

(注5) 東京大学名誉教授

(4) まとめ

以上、論じてきたように、日本の歴史において弥生時代は時期と地域により様々な実態を呈している。「弥生時代」と一括りでの説明は困難な時代なのである。

3 弥生時代は殺し合いの時代か

(1) 初めての武器使用の争い
縄文時代に戦いがあったとの考古学的証拠はない。日本列島で初めての戦いは朝鮮半島からの渡来弥生人(以下、「渡来人」という。)と縄文人の間で生じたのだ。

町田章(注6)は「渡来人が土地を奪取し、または労働力を確保するため縄文人を武力で威嚇したことは考えられることである」と述べている。

両者衝突の原因は2点考えられる。1つは渡来人による縄文人の土地の収奪であり、2つ目は渡来人が労働力確保として縄文人を強制労働させることである。

争いがあったという根拠がある。福岡県新町遺跡から弥生時代早期末の朝鮮系磨製石鏃が熟年男性に突き刺さった遺骸が見つかった。この熟年男性は縄文人系の骨格であり、抜歯のあとがあることから縄文人と考えられる。

勿論、この1例だけで断定することは出来ない。そこで縄文人

が望んで水田稲作に協力したのか否かである。藤尾は「縄文人が食料窮乏から水田稲作に飛びついた」という説は誤りである」と述べている。当時食料は足りていたのだ。

また、「中の文化」で水田稲作がなかなか伝わらなかつたのも縄文人と渡来人の世界観や価値観の違いからと記している。この様な状況下で縄文人が渡来人の水田稲作に快く協力したとは考えにくい。このため、渡来人は労働力確保のため武力を行使し縄文人を強制的に働かせたと推察するものである。

(注6) 独立行政法人文化財研究所理事長

(2) なぜ戦いが起きたか

弥生時代前期後半から中期前半にかけて渡来人同士の戦いが生ずる。要因は以下の2点と言われる。

① 弥生時代のような農耕社会では、多くの生産物が出来て食料に余裕ができる。そこで人口が急増し、やがて食料が不足する事態を招く。このため新たな耕地や水が必要となり、集落間

での奪い合いで戦いが生じることとなる。

② 農耕社会は縄文時代と同様に定住化する。と同時に荒地を水田耕地に開拓していく労苦・愛着等から、その耕地防衛の意識が強力となることである。

(3) 戦いの証拠

戦いの考古学的証拠として佐原は

- ① 人を殺傷するための道具と身を守る防具である「武器」(剣・刀・槍・弓矢・盾)の出土
- ② 防御施設を備えたムラの出現
- ③ 殺害された戦士の遺骸
- ④ 戦いの犠牲者の墓
- ⑤ 武器崇拜
- ⑥ 戦いを表した芸術作品

の6点を挙げている。

6点のうち、ここでは①武器と②防御施設のうち、環濠集落および③殺害された戦士の遺骸について解説することとする。

① 武器

武器は紀元前10世紀後半に朝鮮半島から渡来人と共に入ってくるが、武器の使用は紀元前9世紀になってからである。事例としては弥生文化成立当初

の遺跡である「佐賀県菜畑遺跡」から柳葉式磨製石鏃が、「福岡県曲り田遺跡」から有柄磨製式石剣・柳葉式磨製石鏃が出土している。

② 防御施設としての環濠集落
環濠集落とは、周囲に堀・溝を巡らせた集落のことをいう。

稲作開始当初(紀元前10世紀)に環濠集落は検出されていない。紀元前9世紀になると福岡市那珂遺跡、板付遺跡や江辻遺跡などが現れてくる。なぜ環濠が造られたかであるが、集落間の抗争から防御のため環濠を設けたが一義的であろう。だが近年、防御のみでなく集落内部の結束力を強化するためとか、排水に利用のためなどの説も唱えられるようになった。

また、東北地方と茨城・栃木県では水田稲作を取り入れても環濠集落が造られていない地域がある。

③ 殺害された戦士の遺骸

これについては、橋口達也(注7)の「弥生時代の戦いに」に調査結果が詳述されている。資料数は118遺跡で262例が記載。うち九州が97遺跡で

228例を数える。九州以外では山口県、岡山県、島根県、兵庫県、大阪府、京都府遺跡から発掘したものである。ここには武器の種類や受傷部位などが書かれていて、読む者に凄惨な戦いが行われたことを連想させる。著名なのは紀元前1世紀の佐賀県吉野ヶ里遺跡の甕棺内から出現した骸首された遺骨である。

なお、年代別では前期後半が17・6%、中期前半が34・8%で多く、中期後半が10・9%となり、後期後半では0・9%となる。これから見ると前期後半から戦いが増加傾向となり、中期前半が最大で次第に減少したと言える。ただし、これらは甕棺からの出現したものであることや鉄製武器が含まれていない条件下のことである。

確かに戦いで殺害された人達がいいたことは了解できたが、弥生時代を通してこの数はかなり少ないのではないだろうか。

(注7) 歴史研究家

(4) 弥生時代の戦いの概要

紀元前10世紀後半に北部九州において渡来人により水田稲

作が行われる。その際には武器も導入されていたが使用した形跡はなく、環濠集落も出現していないので、渡来人同士の戦いはまだ無かった。

そして、約100年後の前9世紀後半頃（早期後半）になると人口が増加（遺跡の数の急増）し、環濠集落や戦死傷者の人骨および副葬品を持つ墓（福岡市雑餉隈遺跡）などが見られるようになる。これは集落間の可耕地・水を巡る争奪（戦い）が行われるようになった証である。特に低地の水田耕地は満杯となり、丘陵部へ進出は自然の成り行きであった。前期後半から中期中頃になるとこれらの戦いは頻度を増した。やがて、期末になると、他集落との抗争や戦いの中から腕力や勇気があり、頭脳が切れる有能な指導者（首長）が現れてくる。また集落の幾つかがまとまった共同体が発生したのだ。首長は中期前半頃になると共同体内での争いの仲裁や他共同体との戦闘指揮をする。中期中頃には剣や戈の切り先発掘が急減することから共同体内での争いは一段落したと考

えられる。

時期をずらして中国・四国・近畿・東海までが北部九州と同様に弥生農耕民（渡来人の土着）同士の戦いが広がる。さらに他共同体との衝突、抗争へ発展していく。

後期後半からは戦闘の結果を示す考古学的な資料は少なくなる。

(5) 弥生時代の南関東

久世辰男（注8）によれば弥生時代の南関東に戦乱状況はなかったと論ずる。その根拠として

①石製武器の欠如ないし僅少

宮ノ台期（弥生時代中期後半）後期の南関東全体で出土した石剣が10点程度、石鏃は打製・磨製を併せて約60点程度である。

また、宮ノ台期の鉄器は鉄斧・刀子などの生産財で、鉄製武器はほとんど存在しない。

②敵対者の不在

鶴見川水系においては弥生中期中葉までは集落はほとんどない。宮ノ台期の移住者達は適当な間隔をあけて入植をしていて、

耕作地を奪い合う敵対者は見当たらない。

久世の主張に同意するものであ

る。（注8）考古学者

(6) 倭国大乱はなかった

中国正史の『後漢書』に「後漢朝の恒帝、霊帝（146年～189年）の間に倭国大乱があり互いに攻撃しあった」と記述されている。しかし、樋口によれば「後期後半の北部九州で戦により集落全体が消滅したものを見出すことはなく、戦場となつた可能性はほとんどない。また、畿内においても倭国大乱に結び

付く剣、矛などの武器類は皆無に近く考古資料では裏付けできない。」と述べている。

ただし、「弥生時代末期の鳥取県青谷上寺地遺跡が戦場であった可能性があるといる。当遺跡はこの時期に属する多くの殺傷人骨が異常な状態で検出している。出土状況から戦闘によって

戦死した者であり、これらは倭国大乱の証左である。なお、敵は北部九州勢力であった可能性が強い。」と述べている。

私はこの説には反対である。

1つは、倭国は九州内にあると考えるからである。青谷上寺地遺跡は鳥取県に位置するので該当外である。2は『後漢書』に「倭国大乱があり互いに攻撃しあった」と「互いに攻撃」と書かれているのなら北部九州に戦乱の痕跡が何も無いのは納得できない。

3は青谷上寺地遺跡から銅鏃が腰に刺さった成人男性、額に傷を負った若い女性の頭骸骨など確かに尋常でない殺傷の人骨が発掘されている。ただし出土の人骨が5300点あるが、人体に換算すると109体分である。のうち殺傷痕があるものは僅か10体分に過ぎない。これをもって倭国大乱とするには余りにも数量が希少である。

現時点では倭国大乱の考古学資料の証明は出来ていない。すなわち倭国大乱は無かったのである。

倭国大乱の記載は、『後漢書』が誤りか、年代が異なっているのか、それともまだ根拠となる資料が発掘されていないかである。

4 結論

(1) まず2弥生時代の実態でも述べた通り、この時代は時期と地域により異なった文化形態であり、「弥生時代は〇〇」と一括して論ずるのは適当ではないといえる。

(2) 確かに我が国に初めて戦いの考えと武器などが朝鮮半島から渡来人によりもたらされたのは弥生時代である。また、実際に戦いが行われたのも事実である。特に当時の戦闘は相手の集落に攻め込むという集落が攻防の場となり、集落の人達が武器をとって戦った唯一の時代といえる。だが、前述2弥生時代の実態にもある通り水田稲作の導入だけを見ても時期・地域により大きく異なっている。縄文文化の地域は戦いがなかったのである。また、南関東では戦いの痕跡がないし、倭国大乱もない。全体的に武器の出土数が少数であり、また傷ついた人骨も大量ではない。弥生時代の人口も増加している。以上を総合的に考えると、弥生時代の初め、北部

九州では多くの戦いが見受けられるが、他の地域では北部九州ほど多くはないと考える。以上から「弥生時代は殺し合いの時代」は適当ではないと結論付けるものである。

参考文献

- 1 「考古学による日本歴史 6戦争」編集大塚初重他3名 雄山閣2000年9月5日発行
- 2 「弥生時代の戦い」 橋口達也著(株)雄山閣 2007年1月20日発行
- 3 「人はなぜ戦うのか」 松木武彦著(株)講談社 2001年5月10日発行
- 4 「新」弥生時代 藤尾慎一郎著(株)吉川弘文館 2011年10月11日発行
- 5 「蘇る大環濠集落」編集・発行 横浜市歴史博物館他1 2001年7月20日発行
- 6 「弥生のいくさと環濠集落」編集発行 横浜市歴史博物館・(財)横浜市ふるさと歴史財団 1995年3月25日発行

